

金沢市立三馬小学校

[はじめに]

本校は、金沢市の南部に位置し、明治7年5月に開校し、創立136周年を迎えた伝統ある学校である。

学校の北西には伏見川が流れ、桜が立ち並ぶ川縁は子ども達や地域の方の憩いの場となっている。校区の伏見川沿いの西側の横川には、田園と古くからの町並みが広がり、東側の有松には商業地、北側の泉方面は住宅地となっており、古い町並みと新しい町並みが混在する地域である。

本校では、今年度ユネスコスクールの認定を受け、環境や国際理解を主要テーマとして、持続発展教育の実践に取り組んだ。

共に生きる 未来に生きる
～三馬から 地域へ、世界へ～

1 ユネスコスクールとしての取組

(1) 3年 「地域と交流して学ぼう」

3年生は、『地域と交流して学ぼう』をメインテーマにし一年間「総合的な学習」を構成した。主な活動として、学校の伝統である「三馬っ子音頭」を4年生に教えてもらって覚え、運動会や地域の夏祭りや公民館の文化祭等で披露した。



また、地域でサツマイモを作っている方からサツマイモ作りを教えていただき、校区の畑でサツマイモを育てる体験活動を行った。地域の方々との直接交流としてはデイケアサービスに出向きそこに通所するお年寄りと一緒に遊んで交流したり、地域に住むお年寄りを学校にお招きして、けん玉・こま・お手玉・あやとりなどの昔遊びを教えていただく活動を行った。

これらの学習を通して、児童は自分の暮らす三馬校区について目を向けることができるようになり、さらに地域に関心を高めることができるようになった。また、それまでは地域の方々との交流のなかった子ども、近所のお年寄りに優しく声をかけたり、気軽に挨拶したりするようになり、地域のお祭りにも積極的に参加する子どもの姿が見られるようになった。

(2) 4年 「みんなが住みやすい町」

まず『点字ブロック』や『スロープ』の写真を提示し、<これらは町に必要なものか>と問いかけた。すると、町にはいろいろな人が住んでいて、特に障害のある人にとって必要だと答えた。そこから、<三馬の町が誰にとっても住みよい町か>という課題ができた。この課題を解決するために、①お話を聞く ②体験する ③町に出て他にもないか調べる ④本やパソコンで調べる等が出され、これらの方法で考えていくことになった。子ども達は、ブラインドウォークや高齢者体験などの疑似体験を行い、目が見えない恐怖や毎日の生活で苦勞することを肌で感じた。ゲストティーチャーからは、障害があることはかわいそうなことではないことやコミュニケーションの大切さを教えていただいた。泉野図書館、金沢市総合体育館、金沢市教育プラザ富樫を見学し、どの施設にも様々な工夫があり、利用する人にとって使いやすい施設になっていることが分かった。最後に、グループごとにポスター等にまとめ、学年全体で交流した。そして、これらの学習を受け、三馬は住みやすい町かどうかを話し合い、一人一人が自分にできること、もっと改善したら良いところを考えた。どの施設にも様々な工夫がされていることから、三馬の町は住みよい町だとどの子どもも感じていた。また、便利な道具や施設はこれからも増え続けるだろうとも考えており、三馬の町はもっと住みよくなるだろうと考えていた。加えて、便利な道具や施設が増えるだけでなく、自ら率先して手助けをできるようになりたいと考える子どもも多かった。



(3) 5年生 「三馬から考えよう 地球の環境を」

5年生は「三馬から考えよう 地球の環境を」をテーマに学習を進めた。前期は近くを流れる伏見川の環境について考え、後期はさらに地球の抱える環境の問題について調べた。



まず伏見川の観察から、川の流れはきれいで鳥や生き物が多く見られ、自然にあふれる川であることが分かった。しかし、川の中にゴミが多くあり、本当にきれいなのかという疑問を持った。そこで、医王山中学校の山本校長先生に来ていただき水生生物とパックテストで水質調査を行った。「少し汚い」という結果に驚いた。そこで、是非きれいな川にしたいと思い、5年生全員で川のゴミを拾う活動を行った。そして、このことをいろいろな人に知ってほしいと考え、NHK放送体験で番組を作り発信した。

さらに、12月になりサケが遡上してくることを知り、これからもサケが遡上する川にしていきたいという思いを持ち、サケの卵の観察・稚魚の飼育・放流を行った。

後期は、校区だけでなく地球環境の現状について資料や本・インターネットなどから情報を収集し、自分にできることは何かを考えまとめた。そして、ポスター・新聞・ペープサート・紙芝居・本・劇・プレゼン用のソフトを用いる等の多様な表現方法で、学年の子ども達や保護者に発信した。

これらの活動を通して、子ども達は身近な伏見川をもっときれいにしたいと強く思うだけでなく、身近な環境が地球環境とつながっていることを知り、地球環境を守りたいという思いを抱くようになった。そして、電気をこまめに消す、ゴミを分別する、ゴミを捨てない等、子ども自身ができることにこれまで以上に取り組むようになった。

(4) 6年生 「共に生きる 未来に生きる」

働くのは何のためか？社会にはどんな仕事があるのか？と調べた後、子ども達は、自分の憧れの職業人に手紙を書き、直接お話を伺ったり質問紙への回答をお願いした。そのうち、保育士、水族館の飼育員、パティシエ、酪農家など16名の方が来校してくださった。また、マラソン赤羽有紀子選手、プロ野球大松選手など20名以上の方からお手紙もいただいた。子ども達は、憧れの職業人の来校や回答に、とても喜んでいて、どの職業人からも、仕事をする上で大切にしていることなどを教えていただき、今自分に大切なのは「関わる力」「小さなことを一つ一つ積み重ねること」など、一人一人が気づくことができた。



その後、子ども達に、多忙な職業人の方がみんなに返答や来校して下さったのはなぜか考えさせた。子ども達は「ぼくたちが期待されているから」「私たちに夢を持ってがんばってほしいから」などと考えていた。この問いかけにより、ESDの視点である、子ども達たちが次の社会の担い手であることを意識させることができた。

職業について学習することで、将来の夢を明確にし、夢に向かって毎日の学習や生活に取り組んだり、今の自分に必要なことは何かを見直したりすることができた。また、仕事をする上で大切なことや、働く人への感謝の気持ち、生きるすばらしさも感じていた。さらに、障害を持ちながらも懸命に生きる方や世界の子どものために働く方からもお話を伺い、多くの世界に目を向けて生きる大切さも学んだ。

(5) 全学年での取組

本校では、全学年で食教育にも取り組んでおり、加賀野菜や金沢近海の水産物の生産者を招き、金沢伝統の食文化にふれる学習も行っている。これらの学習を通して、金沢を大切に、伝統を守ることのすばらしさや出会った方の生き方や仕事に向かう姿勢、人との関わり方などを学んでいた。また、児童会活動では、国際協力として、30年以上にわたり「オレンジ作戦」を行っている。オレンジ作戦では、今年はブルキナファソの方から国の現状を聞き、児童会を中心として文房具の援助などを行った。

2 成果と課題

(1) 成果

- ・本校では、3年「地域」、4年「福祉」、5年「環境」、6年「国際理解」「共生」をテーマに据え、学年を追うごとに、校区→金沢→世界へと視野を広げるような学習を展開した。これにより、子ども達は身近な地域の人から、お年寄り、園児、障害を持った方、世界の人々、など多くの人々と生きるために、まずは相手のことを受け入れ、理解しようとする態度が多く見られるようになった。
- ・出会った方の生き方を学ぶ学習から、子ども達は、これからの自分の行動や将来の姿について考えたり、環境を守ったり改善したりしていかなければならないという思いを強くしていた。それを行動として表していく子どもも多く見られた。
- ・子どもの学びが充実したものになるよう、総合的な学習の時間と他教科との関連を図り、総合的な学習のカリキュラム上に明記した。

(2) 課題

今年度、6年生の国際生物多様性年での記念植樹の際、金石町小学校6年生が1年半育てたコナラの苗木を植樹し、現在も育てている。来年度は他の学年でも他校とのネットワークを広げ、学びを深めたい。